

第4章 研修報告

令和5年度 国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育専門研修 報告

1 はじめに

国の支援教育の流れや他の都道府県での支援教育の取り組みを知ること、また肢体不自由教育に関する知識を深めたいと思い、令和5年度国立特別支援教育総合研究所特別支援教育専門研修に参加した。そこで学んだことや取り組みについて報告する。

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所とは、我が国の特別支援教育のナショナルセンターとして設置され、特別支援教育に関する研究のうち主として実地的な研究を総合的に行い、及び特別支援教育関係職員に対する専門的、技術的な研修を行うこと等により、特別支援教育の振興を図ることを目的としている機関である。

特別支援教育専門研修とは、インクルーシブ教育システムの充実に向け、障害のある幼児児童生徒の教育を担当する教職員を対象として、多様な学びの場（通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校）における各障害種の教育の中核となる指導者（スクールリーダー）の専門性向上を目的とし、専門的知識及び技術を深め、指導力の一層の向上を図り、今後の各都道府県等における指導者としての資質を高める。また、特別支援学校教員においては幼稚園・小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・中等教育学校を含む地域支援の一層の充実を目指し、地域の中核となるようその専門性の向上を図る。

（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 HP より引用）

2 取り組み

【肢体不自由教育コース】

期間：令和5年5月8日（月）～令和5年7月7日（金）

※集合・宿泊型研修は5月29日（月）～6月16日（金）

Web会議システム（Zoom）によるオンラインと宿泊を組み合わせで研修を実施。

時間：8時30分～17時15分

講義は9時15分～16時15分（休憩時間を含む）。講義時間の前後については、自主研修の時間。

特別支援教育専門研修は、講義、演習、研究協議、実地研修、課題研究から構成されている。

その中の研修協議（研究協議は、班毎にテーマを設定し、研修員がそのテーマに沿って問題の解決や課題の実現に向けて主体的、自発的に協議を行うことを目的として実施）での取り組みについて報告する。

◎研究協議について

(1) 本班の研究テーマ

「障がいの重い子どもの算数科における評価基準の作成～Ｓスケールの発達段階の意義に焦点を当てて～」

(2) テーマ設定の理由

徳永豊氏のＳスケールをもとに発達段階を理解することで、障がいの重い子どもでも、一人ひとりの実態に合わせて小学部１段階の評価基準が設定でき、系統だった指導ができると考えた。

(3) 研究の目的

本研究では、徳永豊氏のＳスケールの考え方をもとに、発達段階の意義を読み解き、各スコアにおける小学部１段階算数科の「思考・判断・表現」の評価基準を整理する。

(4) 内容

発達段階の意義を読み解き、発達段階ごとに小学部１段階算数科の「思考・判断・表現」の評価基準を整理した。

(5) まとめ

Ｓスケールや段階意義の系統図を使って学習指導要領を読み解くことで、障がいの重い子ども一人ひとりの実態に応じた評価基準を作成することができた。

特に障がいの重い子どもの指導に当たっては、段階意義や系統図を理解し、一人ひとりの実態に応じた指導目標や指導内容の設定が大切であると再認識できた。この研究を通して、障がいの重い子どもにも教科の視点をもって指導目標・指導内容の設定、評価ができると実感できた。

3 まとめ

国立特別支援教育総合研究所特別支援教育専門研修に参加し、肢体不自由教育について講義や演習等を通して、より専門的な知識及び技術を深めることができた。研修の前半は、肢体不自由教育だけでなく、様々な障がいについての基礎知識や支援教育の動向、学校運営についても学ぶことができた。演習では摂食指導や身体へのアプローチ、車いすスポーツなどについて実際に体験しての気づきも多くあった。同時期には視覚障がい・聴覚障がい・病弱教育コースの研修も実施されており、他のコースの講義を聴講することや、宿泊期間中は先生方と関わることもでき、様々な障がいに関する知識や支援方法についての理解を深めることができた。肢体不自由支援学校に通う児童生徒は、障がいを合わせ有する場合が多く、他のコースの先生方から学んだことを今後活かしていきたい。本研修に参加したことで、全国の先生方との関わる機会となり、他府県や学校の教育課程や医療的ケア、ICT教育、学校設備について全国の支援教育の実際について知ることができ、研修終了後も情報交換ができるネットワークを構築することができた。

本研修での学びを今後も学校現場に還元するとともに、自分自身の専門性も高めていきたい。